

近現代の朝鮮半島

今回学ぶこと

19世紀後半に朝鮮は日本・欧米との間で開国し近代化を目指す。しかし、日本の朝鮮半島への進出が本格化し、1910年に朝鮮は日本の植民地となる。植民地期の朝鮮において、日本は統治の度合いを強めていった。第二次世界大戦での日本の敗戦により、朝鮮は植民地から解放されたが、その後、アメリカ・ソ連の対立関係を反映した冷戦構造を背景に、朝鮮半島の南北は分断され、その分断状況は今日まで続いている。今回は、近現代の朝鮮半島の歴史を国際関係の推移と関連付けながら学ぶ。

調べておこう・覚えておこう

- 朝鮮の開国前後において、中国や日本との関係がどのように変わったのか調べてみよう。
- 植民地の朝鮮において、三・一独立運動（1919年）が起こった背景はどのようなものであったか調べてみよう。
- 朝鮮半島の南北に、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国が樹立された後、それぞれの政治や経済の歩みはどのようなものであったか調べてみよう。

朝鮮の開国と近代化

1876年、朝鮮は日本との間で日朝修好条規を締結し、その後、欧米との間でも条約を結ぶ。これらを契機として朝鮮王朝は近代化路線をとるが、朝鮮内部では近代化のモデルを中国（清）と日本のどちらに採るかで政治勢力が分裂する。また、朝鮮の宗主権をめぐる日本と中国との緊張関係も高まり、1894年に日清戦争が起き、戦争は翌年日本の勝利に終わる。

朝鮮は清との冊封関係を破棄し、1897年に大韓帝国と国号を改称した。この後、朝鮮半島にはロシアがその権益を狙って進出し、今度は日露の権益争いに朝鮮が巻き込まれることになった。1904年に勃発した日露戦争で日本が勝利すると、日本は韓国の外交権を奪い保護国化する。この時期、韓国内では言論・教育活動等を主軸として民族の力を強めようとする愛国啓蒙運動や、日本に武力で抵抗する義兵運動が展開されたが、日本はさらに大韓帝国の内政権を掌握し、1910年には韓国併合を行って、韓国を植民地化した。

韓国併合と日本の植民地支配

1910年の韓国併合によって植民地化された朝鮮では、朝鮮総督府が設置され、統治が行われた。当初、朝鮮人の言論・集会・経済活動などは著しく制限され、1919年には第一次世界大戦後の民族自決主義の影響も受けながら、植民地統治に反対する人々によって大規模なデモやストライキなどが各地で行われた（三・一独立運動）。

その後、総督府は規制を緩め、朝鮮人の文化・経済活動の規制を緩めたが、1937年の日中戦争勃発以降は、朝鮮人を戦争に動員するために「皇民化政策」を展開し、日本語普及の強化、創氏改名などの政策を通して朝鮮人に対し日本人化を強固に迫った。戦局が拡大し、日本が第二次世界大戦へと参戦していくなかで、日本の労働力不足を補うために朝鮮人が炭鉱や工場などの労働者として動員されたほか、慰安婦として女性が戦場に送られることもあった。しかし、1945年、日本の敗戦により植民地支配は終わった。

分断国家の成立と南北関係

1945年に日本の植民地から解放された朝鮮では、北緯38度線を境に北部をソ連軍が、南部をアメリカ軍がそれぞれ占領することになった。1948年に南部では李承晩^{イスンマン}を首班とする大韓民国が、北部では金日成^{キムイルソン}を首班とする朝鮮民主主義人民共和国がそれぞれ樹立された。1950年に朝鮮戦争が勃発し、1953年に休戦となるが、以後朝鮮半島の南北分断の状態が固定化して現在に至る。

1960年代以降韓国では軍事政権下におかれるが、日本との国交正常化やベトナム戦争を通じて「ハンガンの奇跡」とも呼ばれる経済成長を遂げる。しかし、軍事政権下において人々の民主化の要求が高まり、1980年代末に民主化を成し遂げた。一方、北朝鮮では、朝鮮戦争前後から社会主義による国家建設が本格化し、経済成長を遂げたが、1970年代以降は経済が停滞していった。北朝鮮では1994年に金日成が死去したあとも、その息子金正日^{キムジョンイル}、孫の金正恩^{キムジョンウン}と一族が最高指導者の地位を引き継ぎ、独裁体制が続いている。このように南北朝鮮は対立関係にあったが、1970年代初頭から断続的に対話が続けられ、2000年には初の南北首脳会談が実現した。しかし、その後も南北朝鮮間の緊張関係は続くことになった。

